
はつ こい

画伯M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はつこい

【NZマーク】

N1737D

【作者名】

画伯

【あらすじ】

美澄とヤスの激しくも悲しい甘酸っぱいはつこい。

ヤス・・・ヤスは空のむこうからあたしを見守つてくれる？

「ヤスやみしこよお・・・」

あたしの名前は美澄。高校3年生回りは受験勉強でピリピリしている。でもあたしは将来の夢を決められずにだらだらすゝじしていた。

けいていが近くで叫んでいた・・

「やめてようアツーーー」

そんな前の見えない暗闇に光をさしこんでくれたのはヤスなんだ。

ヤスとの出会いはあたしがなにもすることなく街をブラブラしてゐときだつた。

これが全ての始まりだつたんだね。

11月26日の夜なにをする?ともなく歩いてゐると・・

ガシッボカッ

「え？ なに？」

あたしにはなにがなんだか分からなかつた。みるところの男があたしを取り囲み下半身をあらわにしていた。

「お前らなにしてんだよつ？？」

それがヤスとの出会い。

その時の言葉は、スバルタの兵士3万人の雄叫びの如く私の外耳道を侵入し、鼓膜を振るわせたがしかし、側頭葉細胞ひとつひとつを優しく包みこんだ。

だけど同時にあたしの怒りや憎しみに包まれた涙が頬をつたつた。

あるいはその涙は安堵を孕んでいたのかも知れない。

きづいたらあたしは星のない東京の夜空に叫んでいた

「あたしの処女膜かえせ——」

そうだあたしはレイプされていたのだ。

ヤスはあたしを優しくつみこんでくれた。

そんなヤスを気に入りあたしは言ったの・・・

「あなた・・・と合体したい。」

あたしは1万年と2千年前から恋をしていたのかもしない。

それから日々は全てが輝に満ちていた。

ヤスとはいつぱいたーとしたし合体もした。

一人のデータコースには必ず行く場所があった、街が一望できる街外れの丘だ。

そこでヤスはあたしにペンドントをくれた。このペンドントは産まれて初めて貰ったプレゼントであたしはこのプレゼントを一生大切にしようと心に誓った。

そこはあたしがレイプされた場所でもあると同時にヤスという希望の光と出会った場所だった。

そこでも合体した。

そんなある日あたしにまぐるものがこなくなつた。

それでもあたしはもしかしたら遅れているだけじゃないといふ仮初めの希望にすがりついていた。

そんなんある日ヤスと牛角で塩ハラミを食べているときに、不快感と共に胃の内容物が牛角の鉄板のうえにもんじやした。

あたしはすぐにトイレに行き妊娠検査薬を使った。

・・・・結果は陽性。

真冬の乾いた空を暗く包み込む、黒雲のように突然、現前した現実を、あたしは受け入れられずに茫然とした。

鈍器で殴られたような衝撃と、内蔵を悔い破られるような痛みが、自意識とは隔離された世界であたしをのみこんだ。

席に戻るとヤスはあたしがはきだしたもんじやを綺麗にたいらげていた。

いい機会だとあたしはヤスに全てを伝えた。

「あたし妊娠しちゃった。」

ヤスは

「産めば。」

と言つてくれた。

あたしはそんなヤスの言葉が全身を駆け巡り歓喜の雄叫びをあげた。

「シャーツオラーツツ」

あたしは生むことにした。

* 1月15日あたしは父の友達に呼び出された。
父の友達の富竹さんは会つなり私を殴りつけた。
ガシツボカツ

「この泥棒ネコッ!? ヤスは3年も前からあたしと付き合つてたの
よつ」

富竹さんは37才無職の小太りの男性だった。

ヤスはバイだつたのだ・・

そのよるは絶望にうちひしがれて家に帰つた。

その晩あたしは腹痛で病院に運ばれた・・

流産していた・・

あたしから流れでたドロドロの肉塊が孕んでいたものは尊い生命と
いう輝きだけではなかつた。あたしの幸せ、希望、未来、全てと同
化していた。がしかし気付いたときにはあたしは絶望の縁にいた。

ヤスはすぐ病院に駆け付けてくれた。しかしヤスはどうかおかしかった

「やめてよ」アツー——やめてよ」アツ——

「ヤ・・ヤス?どうしたの?おかしいよ・・?

「あと・・別離したい。」

「え・・・?」

『あと別離したい。』そう言ってヤスは去つていった。

あたしが経験した別離はヤスとだけではなかつた。

その冬父が逮捕されたのだ。

父は麻薬の運びやをやっていた。

父は中脳に集中しているアセチルコリン受容体に際限なくコカインを供給し続けたために、強化行動が強まりコカイン中毒にかかりついた。

・・・わづひでもいいや

あたしはその頃またヤスと会つ前のようなにもないあたしに戻つていたんだ。

*

あたしは、ヤスと別れたショックから、自暴自棄になってしまった。もう、何もかもが嫌になってしまった。

目に映るすべてがペシミスティックに歪んでいた。

そんなあたしは、犯罪に逃げるしかなかつた、あるいは、死ぬしかなかつたのかもしれない。

でも、死ぬのは嫌。だつて、死んだらすべてが終わっちゃうから……。

だからあたしは万引きすることにしたの。

晩冬の寒さに街が凍える1・2月の夜、あたしはヤスを忘れられずに、『ポートピア連續殺人事件』を万引きするために、元町セブンに行つた。

「いらっしゃいませ」

店員は髭の濃い三十代の男が一人だけだつた。

今しかない！

そう思つて、あたしは『ポートピア連續殺人事件』を鞄に押し込んだ。今思えば、そのとき、ヤスのことも鞄に押し込んじやつたのかもしれない。

あたしがセブンを出よいつとしたじゃ。

「うーんー待ちなさいー！」

ヤバ
い！

あたしは走った

タツタツタツタツ

待て！！

店員は追って来る。

二〇一〇年

息が切れる

ドタツ

バ
キツ

「それもー！」

あたしは店員に捕まつた。

捕まつたあたしはセブンの別室につれて行かれた。

「親に連絡するから連絡先を教えなさい！」

店員は叫んだ。

あたしは頑なに、連絡先を教えなかつた。

連絡先を言わないと店員は長い間、別室で睨み合つた。

店員は、セブンの店長だった。

店長はあたしを叱つてくれた。

本気で叱つてくれる店長にあたしは恋をしてしまつた。

*

「美澄～好きだよ～」

「店長、ノロケすき～」

「美澄～1000回田の恋体じょ～」

「じょうがないなあ～」

あの日、万引きで捕まつて以来、あたしは店長と向き合つていた。

長い間、店長を見つめていたあたしは、店長とやりたくなつてしまい、あたしから誘つた。

「ソノフオマニアのあたしは我慢できないの。

店長のセクスはあたしを力強く貫いてくれた。あたしの過去も憂鬱も絶望も貫いてくれた。

店長と付き合い始めて、また、あたしは幸せの日々に浸れた。

気づけば、もう、春になつていた。

*

あたしの幸せは、やつぱり長くは続かなかつた。

いきなり、あたしの目の前にヤツが現れた。そう、ヤスが現れたのだった。

それは、綺麗な桜が満開の頃。みんなが春を謳歌している頃。

店長と買い物をしていたあたしはいきなり呼び止められた。

「美澄！久しぶり！」

「……ヤス！」

ヤスは短パン、上裸姿で、笑顔をあたしに見せていた。
あの、輝く太陽よりも眩しいヤスの笑顔。

「ヤス！…今まで何やつてたのよ！…！」

「なんだよ、こいつは！…！」

店長が怒鳴った。

あたしを取り合って、二人が戦いを始めた。

「美澄は俺とやり直すんだ！」

「ふざけんな！美澄は今、俺と付き合ってるんだ！」

ドカッ

ボコッ

バキッ

バキッ

勝つたのはヤスだった。

あたしは強いヤスに惹かれた。やっぱりあたしにはヤスしかいないの。

「店長なんか弱いから嫌い！ヤスと付き合いたい！」

あたしはヤスと付き合つたのだった。

でも、あたしの未来はやっぱり暗いものにそうな予感がした。
「ダメ」

場所はいつもの丘。季節は夏。吐息のように囁く。
ここでの合体は何度目だろう。

美澄は体を離すと、ヤスの体を後ろから抱いた。

美澄の手がTシャツの上から胸を優しくゅうくりと撫でた。
美澄が後ろから腰を強く抱いた。

ゆっくりと美澄の腰が下がりヤスの体を持ち上げた。満点の星を見つめながら体が弧を描いた。

見事なジャーマン・スープレックスだった。

犯人はヤスだつたのだ！！！！

獲物を捉えたライオンの眼差しがヤスを突き刺す。

一瞬の出来事にヤスは平生を装つものの、狼狽の色を滲みだしている。

美澄が凍つた時間を碎いて言つ。

「「」の魔法の粉、もちろんヤスは見覚えはあるよね？」

美澄はポケットからつまみ出した透明のビニールをヤスに提示した。

「は？ なんのことだよ、美澄？ 小麦粉ですかあ？ ｗｗｗ」

ヤスは顔をひきつらせながら応える。

「とぼけても無駄よ。もつ多数の証拠があがつてるの。ヤスが不幸の粉の取引の元締めだったのね」

美澄が手を振りかざすと、あたりの草むらから捜査員が一斉に飛び出し、ヤスを囲つた。

ヤスは大きなため息を吐いたあと、空を向いた。

「「」までか……」

美澄について

美澄は自覚していた。今回のヤマを引き受けたのに伴う覚悟。おとり捜査に情を持ち込むのは絶対にやってはいけないタブー。

心は大地に重く腰を下ろす大岩。
どんな雨にも緩いではない。

自覚していた。

自覚していなければならなかつた。

*

「おい、なに呆けている。そろそろ現場に着くぞ。」

助手席美澄に上司が語りかける。

上司の一言にも美澄は上の空だ。

ヤスの麻薬の一件以来、美澄に再び大きなヤマが回ってきた。

国内最大規模の取引がある、といったれ込みが入ってきたのだ。信憑性は高いらしい。

車窓から流されていくビル群をぼんやり横目に、すべりだいを右目に、美澄は心の中でつぶやいた。

「ヤス……ヤスは空の向こうからあたしを見守つてくれる?」

冷たい鉄格子の中のヤスに、美澄の心の声は届いたのだろうか。

美澄は胸元のペンダントを優しく握りしめた。

また、冬が来る。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1737d/>

はつ こい

2010年10月20日10時32分発行